

## 『アクロイド殺し』

アガサ・クリスティ―／著 羽田 詩津子／訳  
早川書房（2003年）

村の名士、ロジャー・アクロイド氏が殺された。生前の彼は何か悩んでいたらしい。アクロイド氏の身内や使用人には動機があるものばかり。そんな中、有力な容疑者である義子のラルフが姿を消した。この村に越してきた名探偵ポアロが真相を探り出す。驚愕の真相で、ミステリ界に物議を醸しだした作品。



## 『占星術殺人事件』

島田 荘司／著 南雲堂（2008年）

「梅沢家・占星術殺人事件」と呼ばれるまでに巷で話題になった1936年の殺人事件は、40年たった今でも解決されていない。御手洗潔は今回の依頼人からこの事件の新たな証拠を提示され、事件の真相を探ってほしいと依頼を受けた。御手洗が一種の猟奇犯罪的な連続殺人事件であり、登場人物の誰にも犯行をなすことは不可能という迷宮入りの事件に挑む。

## 『火村英生に捧げる犯罪』

有栖川 有栖／著 文藝春秋（2008年）

「まったく真実に至るヒントはどこに転がっているか判ったものじゃない。それは、アルコールがもたらす酔酩めいていの中にも、婆ちゃんの小言の中にも不意に出現する」

やさぐれ系ハンサム臨床犯罪学者・火村と、関西弁とんちかん推理作家・アリス。さながら和製ホームズ&ワトソンのおっさんコンビが難事件解決に挑む！表題作を含む短篇4本＋掌編4本の計8本を収録。ミステリー初心者にも読みやすいお勧めの1冊です。

## 『皇帝の嗅ぎ煙草入れ』

ジョン・ディクソン・カー／作 中村 能三／訳  
嶋中文庫（2004年）

ある夜、イヴ・ニールは前夫のネッド・アトウッドの突然の訪問に面食らった。向かいには婚約者トビー・ローズの家があり、カーテンを開ければトビーの父モーリスの姿が見えるというのに。誰にもネッドの訪問を知られたくないイヴは、頑なにネッドを拒絶する。だが、ネッドは窓の向こうでモーリスが殺されているのを発見し…。容疑者として追いつめられていくイヴと、登場人物たちの思惑が交錯する本格推理小説です。

## 『奇面館の殺人』

綾辻 行人／著 講談社（2012年）

奇面館の主人、影山逸史かげやまいつしから届いたある会合の招待状。推理小説家の鹿谷門実しかやかどみは、同業者の日向京ひゅうがきょう助すけに頼まれ、日向のふりをして会合に参加する。影山の趣向で館内では仮面を付け、素顔を隠す招待客6人。ところが翌朝、影山の惨殺死体が発見される。「館」シリーズの9作目ですが、この本だけでも十分楽しめます。



## 『子供たちの探偵簿 ③夜の巻』

仁木 悦子／著 出版芸術社（2002年）

「灯らない窓」は、父親と小学6年の息子、両方の視点で推理が進んでいきます。ある日突然、母親に殺人の疑いがかかり、警察に連れて行かれる。事件前夜に母親の不審な行動を目撃した進が、妹の直子と少年探偵団よろしく捜査していく。この本には「小さい矢」「聖い夜の中で」の3編が収録されています。

